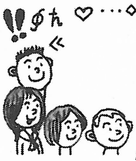

連載　いつきのつれづれ日記 ⑭

出会いをつながりに

4月×日

夕方、会場に到着した。すでに３人ほどメンバーが来ていて、テレビを見ながら和んでいる。「どうしたん？　まだ買い物行ってへんの？」「じゃぁ、そろそろ行ってきます」「ほいよ。ビールは○ビスを買ってきてな」。しばらく留守番をしていると、やがてにぎやかな声が聞こえてきた。自称暴走機関車ことトーマスだ。今回は彼女連れか。

さて、今日もにぎやかな夜になりそうだ。

＊　＊　＊

トーマスとの出会いは、彼の高校時代、2004年の「全国在日外国人生徒交流会」でした。

アメリカ人軍属の祖父を持つトーマスは、小さい頃は「じいちゃんはアメリカ人やねん」と自慢げに語っていたと言います。ところが、第二次性徴の頃から、だんだんと体毛が濃くなり、身体の大きさも「アメリカンサイズ」に変化していきました。「あ、やばい、これ確実にイジメられる」と思ったトーマスは、だんだん自分の祖父のことを言わなくなりました。その頃を振り返って、トーマスは「言わなくなるようになると、次は隠したくなり、隠しだすと、次は否定しだすようになった」と言います。そして、日本人になるには何をしたらいいかと考え、だんだん右翼的な人間になっていきました。

そんなトーマスが、高校生の時にある教員から「全国在日外国人生徒交流会に参加しないか？」と誘われました。「つぶしてやる、日本人の怖さを思い知らせてやる」と思って参加した交流会でしたが、そこでトーマスは大きな転機を迎えました。参加者から「外国の名前はないの？」と聞かれ、生まれてはじめて「トーマス」と呼ばれ、「なんかうれしいと感じた」こと。みんなが泣きながら自分の経験を話しあっていること、etc、etc…。交流会が終わり、家に帰って何日もトーマスは悩みました。「オレ、何人(なにじん)や？　日本人？　アメリカ人？」、悩んだ末に、小学校の頃に見たアメラジアンスクールについてのニュースを思い出しました。そして「アメラジアンでいこう。ミドルネームにトーマスを入れて生きていこう」と決めました。

交流会は、時として一人の人間の人生を変えるほどの大きな力を持っていることを、わたしはトーマスの存在をはじめとして、たくさんの子どもたちから教えてもらいました。

そんな交流会ですが、子どもたちが高校を卒業してしまうとそれっきりになってしまいます。エスニシティのコミュニティがある場合などは、それでも集まれる場所がありますが、トーマスのようにダブルの場合は、それも望めません。「場」から離れた卒業生たちは、日常生活の中で、徐々に交流会のことを「過去のこと」にしはじめます。そんな卒業生たちの集まれる場所として、わたしは昨年から「卒業生の会」をはじめました。

先日の卒業生の会では、「全国在日外国人生徒交流会にセクシュアリティの問題を持ち込むことは是か否か」について、熱い論議がありました。「交流会は外国人のかかえる問題について話す場所だから、セクシュアリティのことを持ち込むべきではない」という意見に対して、ある中国人の卒業生が、「交流会に参加していた友達が、卒業してから『実は自分はゲイなんだ』と話してくれた。外国人の中にもセクシュアリティで悩んでいる人がいる」と話しました。さらにトーマスは、「オレは『アメラジアン』という言葉と出会うまでは、自分を表現する方法を知らなかった。『アメラジアン』という言葉と出会って、はじめてアメラジアンとして生きることができるようになった。それは『トランスジェンダー』という言葉と出会ってようやく自分のことを表現できるようになったといういつきちゃんと一緒やねん」と話しました。

わたしは「彼らの場」をつくってきたと思っていたのですが、実はわたしが彼らに「場」を与えてもらっていたんだと気がついた瞬間でした。さて、今夜もヤツらとトコトン呑もうかな。

（土肥いつき　高校教員）

イラスト／畠山恭子